

## 夏山、はじまる

これから9月末までの短い期間、大雪山旭岳の中腹、標高1,600メートルの姿見平では、「春」「夏」「秋」と目まぐるしく季節が動いていきます。

雪解け進む姿見で最初に見ることができる華やいだ風景は、一斉に班を広げるキバナシャクナゲの群落でしょう。あちこちに残る大きな雪原と、山ひだに雪を残した旭岳、十勝岳の力強い山並みが花々の背景です。

つぼみはちょっと蛍光色に似た黄色です。しかし開いたばかりの花は全体にごく淡い黄色、ほとんど白に近い色になります。

ところが次第にオシベやメシベの軸、花卉の根元などから鮮やか紅色が差していき、数日後、花が落ちるころには、半ばピンク色に染まっていくのです。

6月の姿見の池や夫婦池は、大抵水底に厚い雪が残り、曇った鏡のようなぼんやりした色をしています。

池の底の雪は、最初に一番深い中心にポッカリ濃い色の穴が開きます。この穴が夫婦池の両方に開くころ、池の間の坂道の上から振り返ると、ふたつの瞳に見つめられているようです。

この時期、高山特有の天気は強い日差して、季節を



Nature Column (ネーチャーコラム)  
自然解説員などで活躍する人々をリレーしています。



登山道以外のルートを歩けるのが残雪時期の醍醐味

「夏」に一気に進めるかと思うと、みぞれや雪を降らせて「冬」や「春」に逆戻り。視界を遮って登山者を迷わせたり、凍えさせたりする要注意の時期です。

しかし、この時期の広大な残雪は、山好きの味方でもあります。

夏は登山道の外を踏み荒らしてはならず、冬は深い雪に阻まれて容易に近づけない場所がたくさんあります。現在の登山道も、昔の人が残雪を上手にたどってつけた道が少なくありません。地形や天気など、土地の「癖」を心得て慎重に行動できれば、より広くより深く、大雪山を学べる時期といえるでしょう。

旭岳ビジターセンター 菊地 基



## 本で知るふるさと

### 文化の宝庫、大雪山

東川町は3月末に「大雪山から育まれる文献書誌集」(A4版、51ページ)を500部発行しました。ふるさととの山、大雪山にはさまざまな人がかかわっています。多くの本や研究論文が残され、人のかかわりを視点にすると一大文化の宝庫といえます。町にある大雪山関係の本を公開することによって、町民に愛着を持って広く読んでいただく、さらに大雪山の情報を全国に発信する狙いがあります。



町所蔵の大雪山文献書誌を紹介しています

ページをめくるだけで紙がポロポロ、粉のように欠け落ちるありさまで、多くの人に読んでもらいたいけれども、公開が難しい年代のものもあります。大雪山を舞台にした小説、漫画、写真絵本などは家族で楽しめます。東川町に住む写真家やネーチャーガイドが書いた素晴らしい本もそろっています。

文献書誌集に記載したのは345点です。本を数える単位は一般的には冊ですが、345点としたのは、たとえば季刊誌「北の山脈」は創刊から終刊まで40冊もあり、大雪山国立公園連絡協議会がまとめた「大雪山国立公園 研究・文献集」はバインダー21冊に2千700件の論文を収録しています。文献書誌集には新聞コピー、雑誌も含めていますので町が保管している総数は千点(冊)以上になります。

大雪山という山名が初めて使われた松原岩五郎著「日本名勝地誌 第九編 北海道之部」や、小泉秀雄著「北海道中央高地の地学的研究」は、

大雪山の文献書誌集は345点にとどまっていますが、まだまだあるはずで、町はこれからも情報収集に努め、充実していくようです。文献書誌集は東川町のホームページで紹介しています。

町史編集専門員、西原義弘